

時の魔術師

ファンタジー板

風梨凜



僕の名前は、笹原 隆太（ささはら りゅうた）。

中学2年生。好きなものは学校給食、嫌いなものは学校活動。

今日は学校を休む事にした。なぜって、今日は、学校に行く意味がない。夏休みが明けたばかりの始業式で、給食もないからね。

通学路の近くの桜並木でごろんと寝転がる。今日はからりと晴れたいい天気だな。

「おーい、隆太！ 行かないのか。遅刻するぞ」

お、同じクラスの種田だ。“行かないよ”僕はあっちへ行けとばかりに手を振った。

ちりん ちりん

どこかで風鈴の音がする。でも、風は秋風。9月って、本当に夏と秋が一緒にいる季節なんだな。

「隆太、先に行くぞ！」

種田の声がしたけど、完全に無視。学校で掃除するより、ここで蝉の合唱を聞いている方がおもしろい。

ちりん ちりん

だって、この音が、きっかけになる。

そして、

どこか別の季節へ

—僕は飛べる—

雲が流れてゆく。桜並木が風にゆれている。

それにしても、蝉の声って夏の終りが一番、激しくないか。

“蝉は土の中に幼虫で七年、そして地上で羽化して、生きられるのは、たったの七日“って、いつか誰かに聞いた事があった。

それが、本当なのかは、別にして……

僕の足元に一匹の蝉がぽとんと落ちてきた。なんか、いいタイミングで。

ジジジジ……

「お前、今日が地上に出て七日目か。あわれな奴」

蝉は、そんな言葉なんか聞きもしないで、羽を小刻みに震わせている。

でも、こいつにとっちゃ、あたり前の事なのか。あわれと思うのはこっちの勝手な想像か。

それでも……知っているのは夏の景色だけだろう。

七日だけの寿命を生きて、春に、この桜並木を彩る花の色を、知らないままに消えてしまう運命なんだ。

ちりん ちりん

ーほら、きっかけの風鈴の音ー

次が鳴ったら、

ちりん

“春風満桜”

僕が一番、お気に入りの染井吉野

この世で一番透明なピンクで染め上げて、  
桜並木を満開の花で埋め尽くす。

僕が呼んだ“春”

ジジ……ジ、ジ……

景色はまた、夏。

足元の蝉は、かすかに鳴いた後に羽を止めた。

「あー、なんだか、つまんなくなったな。学校、行くか」

僕はよいしょと立ち上がった。

「あ、蝉、蝉っ！」

学校帰りの小学生が、地面に落ちた蝉に手を伸ばそうとしている。

「捕まえても無駄だよ」

「え、何で」

「もう、死んでる」

「なんだ、つまんない。死んでるの」

「蟬は土に七年籠って、地上に出てから七日目に死ぬんだ」

「ふうん。でも、それって嘘だって先生が言ってたぞ」

「お前の先生って、つまんない奴だなあ」

— いいんだよ。儂い命と思った方が、蟬時雨はきれいに聞こえるんだ —

小学生は駆けて行ってしまった。僕が、ゆっくりと学校へ歩き出した時、

「おーい、隆太！」

また、種田が来た。

「お前、まだ、こんな所にいたのか。学校、もう終わったぞ」

「なんだ。今から行こうと思っていたのに」

「遅えよ！」

種田と一緒に帰る道。明日からは給食が始まる。

「隆太、明日は学校に来いよ」

僕は微妙に笑って、こう答えた。

「それは、給食メニュー次第だよ」

[時の魔術師 ~夏~] 完

私の教室におかしな男子がいる。それも、すぐ隣の席に。見た目はそんなに悪くない。黙って座ってれば、俳優の妻夫木クンに、ちょっと似てる。



笹原 隆太。

外は雪。こんな日には学校よりも、家のコタツでぬくぬく眠っていたい。

でも、今って授業中でしょ？ 笹原は、何かを机から自分の膝に出したかと思うと、それをメリッと開けだした。

え？ ツナ缶？

あっけにとられて、見つめていたら

「食う？」

私の視線の中で、笹原はにこやかに微笑むのだ。

「い、いい……」

「あっ、そう。なら、いただきます」

悪びれもせず、ツナ缶を食す。お箸まで持ってきてるの？

こいつって、給食の時間にふらりと登校してきたり、2時間目にはもう姿がなかったり、もう、やりたい放題。

あんたのせいで、今の数学の問題、先生の解答解説が、ちっとも頭に入らなかったじゃないの。中2の成績だって内申に響くんだからね。

「ねえねえ、美夏、今日やる？ ターゲット決めた？」

2時間目が終わると同時に、友達のゆうちゃんが声をかけてきた。

「うーん、まだだけど……」

ちらりと見た隣の席。授業中はツナ缶に夢中で、休み時間は睡眠の様子。いったい、学校に何しにきてるんだろ？

「笹原隆太にする」

私は、隣に聞こえないように声をひそめて言った。

「えっ、超変わり者だよ」

「いいの。おもしろそうじゃない」

“うそ告”って知ってる？ 最近、私たちの悪友間で、密かに流行っている遊びなんだけど、やり方は簡単。ターゲットの男子を決めて、“告白”するだけ。でも、それは、“嘘”。

……で、後で嘘だってばらしてやった時の小気味良さ。

「笹原隆太がいい」

後で、彼の靴箱にメモを入れよう。内容は簡単明瞭。

“前から笹原君の事が気になっていました。放課後、屋上で待ってます。

石井美夏”

後ろめたくない？ “うそ告”なんて、人の心を傷つけるだけだよ。心の中で誰かが私に問いかける。

べつにいいの。こんな事くらいで傷ついたなんて、思う方が弱いんだ。

\* \*

放課後の屋上

笹原遅いな。呼び出したのはいいんだけど、寒いよ。屋上なんか指定するんじゃないかった。

ほうっと息を吐いてみる。白い息。雪は止んだけど、心の中には白い靄がかかっている。

ほうっとまた、白い息。すると、

あれっ、笹原？

「ごめん。このメモ、くれたの、お前？」

いつの間に現れたの？ ちっとも気づかなかった。

「あ……う、うん」

「……で？」

「……で？ って、あの、だから……笹原君の事が前から気になってて、それで、話を聞いてもらいたくて……」

「あっ、ツナ缶の事？ 隣で食うなどか」

「ちがうってばっ！」

「……なら、何なんだよ」

さすがに鈍そうな笹原でも、少しはメモの意味を理解しているようで、バツが悪そうに視線を私からはずした。ちょっと、ほくそえみたくなる瞬間。それって、多少、期待してる？

「あの、前から私、笹原君が好きだったの」

“うそ告”完了！ 屋上の隅で隠れて見てる、ゆうちゃんにVサインを出したい気分。

でも、笹原の反応はととても、とても以外だった。

ほうっと息を吐く、息を吐く。白い息、白い息……

「そんな事、言われたの、初めてだ」

「……」

「今日って寒いよな」

また、ほうっと……白い息

え、何、ここ、どこ？

入道雲と青い空。  
緑の木々を通り抜ける木漏れ日。  
川の音。堤防を歩く二人の男女。  
どこかで見た景色……

夏休み、これって今年の夏休み？！

それは、一瞬の映像。

私とすごく好きだった……私の先輩。

「……つきあってくれませんか」

「悪いけど……」

「お友だちからで、いいんです」

「ごめん」

「何で？」

「……俺、石田の事あんまり好きじゃないんだ」

「えっ」

いつも、私に笑いかけてくれた優しい先輩。

「おまえ、しつこいよ」

封印していた苦い思いが、心を突き破ってゆく。

「お、おい、何で泣いてんだよ？」

寒い放課後の屋上に座りこみ、涙がとまらない。横にいるのは笹原？ お願い、顔を覗き込むのは止めて。

「ごめんなさい。ごめんなさい。嘘だった……笹原、好きだなんて……嘘ついた……」

はあ、と一つ息を吐き

「泣くなよ。“うそ告”されて泣きたいのは、こっちなのに」

そうだ、とっておきの物があるんだ。笹原は、本当に弱りきった顔で、リュックを開くと、こう言った。

「もも缶があったんだ」



「美夏！ どうしたの?!」

血相変えて、走ってきたのは、“うそ告”を見ていた、ゆうちゃんだった。

「笹原！ あんた、美夏に何、言ったの！」

「知らないよ、勝手に泣き出したのは、石田の方だ」

その時、

「そうだ、俺も見てたぞ！ 悪いのは石田だ！ 俺だって、先週、やられたんだ。“うそ告！”」

突然、飛び出してきた笹原の親友？ 種田は、鬼の形相で“ゆうちゃん”を睨みつけた。

「もう、止めろ、止めろ！ ほら、みんなで気をとりなおして……開けるぞ、“もも缶”！」

屋上での騒ぎを遮るように笹原は言った。

「俺はテストの答えをいつも間違える。何でか教えてやろうか。忘れるからだよ。でも、それって当たり前の事なんだ。人間は忘れる、いや忘れられる。それってすごい機能なんだ。だから、俺はテストの点が悪くても気にしない」

私、もしかして、なぐさめられてる？ よく分からない彼の台詞。

笹原隆太って、本当におかしな奴。

ほろほろと、また、雪が降り出した。

「今日は、寒いよな。本当に寒いよな……」

でも、季節が変われば、また、暖かい日が来るんだよ。

【時の魔術師～冬～】 完

高度7700m、第8キャンプ、北壁ルート。

最悪の吹雪と嵐、地球上に14座しかない8000m級の山の一つ、世界第二の高峰、K2。



その頂上アタックを目前にして、方角を失い、視界をなくす。

手の中にまだ残っている、走っていったザイルの感触。谷底に落ちていったパートナー。

若手登山家のホープとして名を馳せてきた俺“山下慶一”の強運もついに尽きる時がきたのか

。

急な氷壁の斜面に一人取り残され、途方にくれる。

“山で死ぬなら本望”

それは、頂上を極めた人間の言う言葉だ。

俺は、まだ、見ていないんだ。

超然たる聖域、K2の頂を。

\* \*

東北、神室山。高度1365m。

「おい、隆太はどこへ行った？」

笹原隆太の親友（自称）－ 種田 －は、半ばあきらめ気分で辺りを見まわした。

青い空、白い雲。

奴が“秋山登山”に参加した事でさえ奇跡に近い。ましてや、こんな気持ちのいい日に、まともな学校活動をやるわけないよ。

「隆太あ！ 焼き芋できたぞ。だから、出てこいよお！」

中2の俺たちの、テーマは“自然に溶け込もう”

山小屋の裏での“焼き芋”作りと“自然に溶け込もう”がどう繋がるのか、さっぱり、わからなかったが、笹原隆太が登山に参加した理由があるとしたら、“それ”としか考えられなかった

。

奴の好きな物は、学校給食、嫌いな物は学校活動。

“焼き芋”も学校給食なのか。

はなはだ疑問ではあったが、隆太を呼び寄せるくらいの効果はあるはずだ。

「また、行方不明？ 笹原って協調性ゼロ。同じ班になった私らの苦勞も知らないで」

クラスメートの石井美夏が、膨れっ面をして言った。

「あいつって学校をなめてるんじゃないの」

と、その友人のゆうちゃん。

「……せっかく、うまそうな焼き芋ができたのになあ」

「種田は、あいつに甘すぎるよっ」

と、怒りながらも3人は、隆太が戻って来てはいないかと、きよろきよろと辺りを見渡した。どーでも、いい奴なのに、何故か傍にいる方がいい。

種田が、仕方ないなど、焚き火から取り出した焼き芋のアルミホイルに手をかけたその時だった。

「おっ、いい匂い！」

手に栗の実をいっぱい抱えた、笹原隆太が現れた。

「隆太、お前、どこに行ってた？」

聞いても無駄な質問。

「ちょっと、栗拾い。これもパチッと焼いてもらおうと思って」

爽やかに微笑んで、ばらばらと栗の実を焚き火の中へ放りこむ。

パチッ、パチッと弾ける音

……が、突然

ぱんっと、強く弾けた毬（いが）が笹原を直撃した。

「あっ！！」

やばっ、俺、飛ばされるっ！

K 2。吹雪はまだ、静まる気配も見せない。

「とりあえず、テントの入口から雪が舞いこむのだけは阻止しなければ」

風がテントを引き裂いたら、もうどうしようもない。

若手登山家、山下慶一は、冷たささえ感じなくなった手で、懸命にテントを押しえこんだ。

テントを押しえるペグが、吹き飛ばされた時、山下は狂おしげにその方向を見た。しかし、

「……お前……誰だ」

「俺？」

ジャージ姿の少年が、テントの隅にちょこんと座り込んでいる。

「笹原隆太。中学2年」

少年は、照れたような笑いを浮かべ、そう言った。

……この世界最高所に、中学生？！

山下は、妄想を吹き飛ばすかのように、2、3度、頭を横に振った。

だが、

「ここ寒いなー。おっさん、ここで何してんの」

笹原隆太は、屈託なく笑う。

「何してんのか。それは、こっちが言いたい台詞だ！　ここは、世界第二の高峰、K 2だぞ」

「えっ、K 2ってエベレストの次に高い山の？　やばっ。そんな所まで飛ばされてたのか」

まいったなど、隆太はテントの端をめくり、外の景色を覗き込もうとした。

「や、やめろっ！　テントをめくるなっ！」

ところが、

吹雪は嘘のように静まり、西から回り込んできた太陽が山の雪肌をオレンジ色に染め上げていた。

K 2の夕暮れ。羽衣のような薄い雲が長くたなびいている。

「すごいなあ。こんな絶景、初めて見た」

一瞬、はしゃぐ少年が姿が山の景色と重なりあった。稜線の向こうに沈んでゆく太陽にとり込まれるかのように。

山下は無意識に、隆太の首ねっこを引っつかんだ。

「さっさと、中に入れ！　お前、そんな格好で外にいたら、凍傷になって手足の指を全部なくすぞ！」

「馬鹿げてる。まったく、信じられない……ジャージでK 2に登頂？　学校の遠足じゃないん

だぞ」

山下は自分のリュックからヤッケを引き出し、それでも着てると、隆太に放り投げた。

「あ、俺、今日は遠足だよ。秋山登山。“テーマは自然に溶け込もう”」

「……」

「せっかく、種田が“焼き芋”作ってくれたのに、食べそこねたなあ。ちえ、思い出すと、腹がへってきた。おっさん、何か食うもんじゃない？」

「おっさんは、やめろ！ 俺には山下慶一って名前があるんだ。あいにく、食料はほとんど、雪崩で流されてしまった。リュックを探れば、非常食の残りくらいはあるかもしれないが……」

えっ、困ったなあ、隆太は自分のポケットをごそごとと探りだす。

栗の実、ブナの葉、鉄釘、そして、ぴよこんと飛び出したアオガエル。

「お前のポケットは、地球の裏にでもつながってんのか？！」

どこの登山家が、高度7700mでアオカエルを見るんだ！？ あきれ返る山下を気にもせず、隆太はうれしげに笑った。

「あった、あった。おやつにとっておいたチョコレート。えーっと、俺と、おっさん……山下だっけ、それと……」

少し、俯いて隆太が言った。

「あんた、一人？」

「今……はな」

「今はって？」

「俺のパートナーは、北壁の割れ目の深い谷底に落ちていった」

山では弱気になることは、禁忌だ。くじけた心では、気が遠くなるような雪渓を乗り越える事はできない。

「まだ、日があるうちに、このテントの周囲を見にいってくる。うまくルートが見つければ明日は下のキャンプ地におりれるかもしれない。」

山下はわざと明るい声で言った。そして、

お前はここを絶対に動くな。隆太にそう言い残すと、外へ出て行った。

「あ～あ、ここ、退屈だよな……」

隆太は、少し頬を膨らませると、ごろんとテントに横になる。

さわさわと外の雪がきしむ音

あのおっさん、このままだと、死ぬな……

「まいったな、ここまで積雪があるとは……」

山下は口を真一文字にくいしばった。

膝上まですっぽり、雪に埋もり身動きがとれない。山の上部ではまた、風が激しく舞いだした

。

耳元をびゅうと、風が通り過ぎた時、

パキッ

氷の裂ける音がした。

「しまった！ クレバス（氷の裂け目）に……」

驚く間もなく、山下は積雪で隠されていた、その落とし穴に引きずり込まれていった。

真っ暗な奈落に落ちて行く。だが、突然、開けた明るい景色に目をみはる。

「ここは……？」

青い空、白い雲。

がさごそと、手を伝わってくる落ち葉の感触。

“俺、今日は遠足だよ。秋山登山”

隆太の言葉が頭をよぎる。

山下は思わず笑みを浮べた。差し迫った現実から、一瞬、目をそらしたい衝動にかられたのだ

。

だが、

「馬鹿な！ K2の雪と氷と風は幻なんかじゃない。俺を騙すのはやめろっ！！」

再び吹雪に閉ざされた雪稜で、山下は天を仰いだ。

“ちえっ、何でもどってきちまうんだよ”

風がその足元の雪をふわりと舞い上げた。

一面の白い世界が強風にさらされ、激しく揺れうごいている。

もう、無理だ。これでは一步も動けない。

山下は、何かを諦めたかのように、その場に膝から崩れおちた。だが、岩とは違う硬い感触を手元に感じ、はっと、そちらに目をむける。

これは、あいつのピッケル……？

谷に落ちていったパートナーの。

その時、一瞬、途切れた雪の間から、頂上付近が垣間見えた。

K 2 の聖なる頂……何故、お前は俺たちを拒むんだ！

再び視界は閉ざされ、日は暮れて、闇までが近づいてくる。

俺は、ここで死ぬのか……雪に埋もれて、たった一人で……。

だが、

“一人じゃない……だろ”

頭上から突然響いてきた声。信じられないくらい K 2 に不釣り合いなジャージ姿の少年

笹原 隆太……

「お前、何でそこにいるっ。ついて来るなど言ったのに！」

「だって、秋山登山に誘ったって、来やしない。だから、教えてやろうと思って」

「何っ」

「雪崩が来るんだよ」

音もなく波のような雪が流れてきた。

そして、隆太は鮮やかに笑った。

“山が人を拒むものか。山はそこに居るだけだ”

学校の社会の時間。

「隆太、遊んでないで早くやれよ。終わってないのは、俺たちの班だけなんだぞ」  
またまた、うるさい種田がやってきた。

今日の課題は、秋山遠足のレポートをパソコンでまとめる作業。

「ちょっと待てよ。今、ネットで小説、読んでるんだ」

「はあ？ 読みたいなら休み時間に読めよ。時間がないんだから、さっさと、画面もどせ」  
隆太からマウスを奪い取った種田は、あれ？ とパソコンのトップニュースに目をやった。

「先日、世界第二の高峰K2（8,611m）の北壁で雪崩が起き、登山中の日本山岳隊隊員、佐伯数馬、山下慶一が巻き込まれた模様。死亡を確認……ま、死んでも、仕方ないわな。そんな高い山に登るんじゃ」

その時、担任教師に付き添われ、教室に見知らぬ男が入ってきた。

「今日から来てもらった、産休の先生の代わりに先生を紹介するからみんな、着席」

えっ！

何っ！

互いに顔を見交わす、隆太とその男。

「何でお前がここにいるんだっ！」

笹原 隆太！

やっぱり、ついて来たんだな。でも……この展開は以外だったなあ。

隆太は照れたような笑いを浮べた。

おっさん、名前は……山下慶一

社会が終わった後の廊下。隆太を山下がとっ捕まえる。

「こらっ、待てっ！ 俺にきちんと説明しろ」

「何だよ。もう、帰るんだから邪魔するな」

「帰るな！ まだ、2時間目が終わったところだ」

「あんたなんか、知らない」

「しらばっくれるな！」



あの雪崩の後

何で俺は神室山（東北の）にいたんだ。

お前は何故、K 2に現われた。

そして、

何で俺は生きてるんだ！

“時の間を飛び越えてしまったんだよ”

え？ 山下の頭に響いてきた無言の声。

「あの後、この学校の知合いに頼みこんで、先生の職を世話してもらったんだ。登山家の山下慶一の名は伏せて。その説明も四苦八苦だ。考えてもみろよ。K 2で死んだはずの男が、3日もしないうちに日本にいるなんておかしすぎる」

まくしたてるように山下は言った。

「ほとぼりが冷めたら、俺は、またK 2に登る。あの山で別れたパートナーの事が心残りではないんだ」

しらばっくれているのも、面倒だな。ふうと一つ息を吐くと、隆太は笑った。

「おっさん、また、死ぬぞ」

「死ぬものか。K 2の頂を俺はまだ、見ていない」

ふうん。なら、勝手にすればいいや。

「俺、帰るから。今日の給食は、一番まずい酢豚チャーハンなんだ」

廊下の窓からひゅうと秋風が飛びこんできた。舞いこんできた銀杏の葉がぐるりと宙を舞った瞬間、目の前から突然、隆太がいなくなった。

「あいつ、堂々と消えやがった」

もう、驚く気にもなれない。山下は、苦い笑いを浮かべると、次の教室へ歩き出した。

はらはらと舞う銀杏の間を縫うように、風が通り過ぎてゆく。

“山は人を拒まない。だから、人は山を目指すのか”

時の間をすり抜けて

【時の魔術師～秋～】      ー完ー

もろともに あはれと思へ 山桜  
花よりほかに 知る人もなし



「種田……どうしたの？ 急に。気持ち悪っ！」  
「何を言う。俺が唯一覚えた百人一首を」  
「たったの一首！ で、意味、わかってんの？」

「お互いに懐かしいと思ってくれ、山桜よ。花のおまえくらいしか、心をかよわす人がいないから」

聞えてきたおどけたような声に、種田ははっと後ろを振り返る。

石井美夏。この中学で毎年行われる“百人一首大会”のクィーンが現われやがった。

「ま、だいたい、そんなとこかな」

種田の尊大な態度に、美夏の友達のゆうちゃんが飽きたように言う。

「それで、何でその句をしみじみ、詠んでんの？ 今日は卒業式でしょ？ ちっとも、時と場所に合っていないじゃん……しかも、オヤジっぼい」

そう、卒業式。とはいっても、彼らは中学2年生。今日は、彼らの1つ上の学年、3年生の卒業式なのだ。

「だってなあ。バスケ部のキャプテンを見ろよ。後輩たちに囲まれて、きゃあきゃあと……制服のボタンの争奪戦なんて、信じられない光景だ（俺にとっては）」

ゆうちゃんと、美夏は種田のつぶやきを聞くなり、急にぶうっと吹き出してしまった。

「そっか、さっきの句って今の種田の心情？ でも、悲しくない？ 桜くらいしか心を通わす人がいないなんて」

「失礼な奴だな！ 俺にだって親友はいるんだぞ」

その時、ひゅうと風が吹き、校庭に咲いた7分咲きの桜の花がはらりと空に舞いあがった。

「誰か呼んだ？」

突然、どこからともなく現われた少年。だが、種田、美夏、ゆうちゃんの3人はもう、驚きもしない。

笹原隆太。

同じ中学のクラスメート。でも、こいつが普通に現われたためしなんかないんだから。

種田が当たり前のように、隆太に言う。

「あれ？ お前、何で来たんだ？ 今日は卒業式で給食はないんだぞ」

隆太の好きなものは学校給食、嫌いなものは学校活動。

「だって、今日は紅白まんじゅうを配る日だろ？ あれって美味しいよな」

「卒業式はまんじゅうの配布日か」

え、違うのか？

悪びれる風もなく笑顔を作る隆太に、3人のクラスメートは、“はいはい”と、諦め気分で頷いた。

「おーい、そろそろ送り出しの時間だぞ。下級生はさっさと並んで花道をつくれ」

そう言って、体育館から出て来たのは、社会の臨時教師、山下慶一だった。

「相変わらず不必要にでかい声！」

美夏はゆうちゃんと顔を見合わせくすりと笑ったが、山下がこちらを見た瞬間、まずいっ、今日は笹原がいるんだった。

と、大慌てでそっぽを向いた。

「おっ、笹原じゃないか。今日は学校にいるんだな」

案の定、山下は嬉しそうにこちらへやってきた。何故だかしらないけれど、この教師は隆太を気に入っている。

「おっさん、まだ、先生やってんのか。また、K2に登るんじゃないのか」

隆太の言葉に山下はしつと言うと、いきなり隆太の頭を抱え込んで2mほど、皆から離れた場所に引きずっていった。

「俺の名はおっさんじゃない。それにK2の事は皆の前では言うな！」

実は山下は登山家で世界第2の高峰、K2の登頂中に遭難し、その時不意に現われた隆太と一緒に時の間を乗り越えてしまったのだ。それ以来、彼は隆太たちの学校で臨時教師として、働きながら再びK2に登る機会をうかがっている。

笹原隆太……K2にいた俺を一瞬で、日本の神室山に移動させた少年。一体、こいつは何者なんだ？ 普段はひょうひょうとして食べ物の話ばかりの奴なのに……。

「K2の氷の割れ目に落ちていった親友を探しにゆくんじゃないのか？」

「あの山の時間は、地上よりもゆっくり進むんだ。あせる必要なんかない。それに行くにしても今は金が足りん」

山下の言葉に隆太は人の悪い笑いを浮べて言った。

「ま、死んでても冷凍保存されるしな」

「こらっ、罰当たりな事を言うな！」

わかってるさ。あいつの魂はもうこの世にいない事くらい。

山下は少し笑って、隆太の頭を軽くこづいた。

「あ～あ、隆太を先生に拉致られたな。あんなにくっついちまって、あの先生、隆太に気でもあるんかい」

遠巻きに隆太と山下の様子を見ていた種田が言う。

「まさか、気持ち悪い事言わないでよ」

「でも、もしかしたら……」

美夏が、少し不安げに言ったその時だった。

「笹原隆太って、顔は妻夫木くん似で、そこそこいいけど、えらい変わり者って噂じゃない」  
妙にきつい口調で、現われた卒業生。華やいだ雰囲気のかかなりの美人。

「先輩！ 卒業おめでとうございます」

テニス部の先輩、工藤美咲の出現に美夏は笑顔で挨拶する。

「あんな変人と友達？ 辞めときなさいよ。それより、花道を通る時、お花は私にちょうだいね  
。他の人には絶対に渡しちゃだめだよ」

なれなれしく、美夏に話しかけてくる美咲の姿に、ゆうちゃんは種田にそっとつぶやく。

「この先輩……ずっと、美夏にべったりで、すごく嫌。美夏が好きだった男子テニス部の先輩  
にちょっかい出したのも、美夏を独占したい為だったんだよ」

「へえ、それでよく石井は我慢してるなあ」

「美夏はそこんところ、ちょっと鈍感なのよ」

はらはらと桜の花びらが舞う午後に、下級生たちが作った花道を通りぬけ、卒業生たちは校門  
を出て行く。

思い出をいっぱい胸に抱えながら……

「なあんて言っても、また、戻ってきて写真撮影とかするんだよなっ」

雰囲気ぶち壊しの種田の台詞に、美夏とゆうちゃんはあからさまに嫌な顔をする。

「あ～あ、せつかく、いい雰囲気浸ってたのに。ほんと、デリカシーのない奴」

「俺だけにそんな事言うなよ。ほら、隆太なんか……」

種田の言葉に、隆太の方へ目を向けた美夏。

え、寝てるの？ それも立ったまんま。

「笹原っ！ 校庭のまん中でそんな器用に寝ないでよっ」

「え？」

きょとんと目を開いた隆太のまわりで、散った桜の花びらが、くるりくるりとじゃれつくみたい  
に円を描いた。

「いけね、うっかり寝てた。やっぱり、春なのかなあ」

そろそろ、戻んなきゃいけない頃だよなあ……

隆太が、美夏に何か言おうとしたその時、校門の方から声がした。

「いやよ、行かないって行ってるでしょ！」

美夏の前輩、工藤美咲が車で校門に乗り付けてきた男子に腕をつかまれている。

「何でだよ。卒業記念にドライブしようってんだぜ」

「だって、三浦くん、無免許でしょ！」

驚いて声のした方向を見た美夏は一瞬、口籠もってしまった。

「あいつ、知ってるぞ。高等部の三浦和也だ。たしかテニス部の……」

美夏たちが通っている学校は中高一貫の進学校だ。卒業といっても、ほとんどの生徒は同じ敷地内の高校に進む。

種田にゆうちゃんが相槌をうつ。

「そう、3年生の三浦さん。でね、あの人が例の工藤美咲がとったっていう美夏ちゃんの好きだった先輩なんだよ。かっこいいって評判の人。でも、ちょっと見ないうちにすごく不良っぽくなっちゃって……」

そこに隆太が口を出してきた。

「ああ、あれが去年の夏休みに青い空と入道雲が、すごく綺麗だったにもかかわらず、学校帰りの堤防で石井をこっぴどく振っていや～な気分にしたクラブの先輩か」

あまりにも詳しい隆太の情景描写に、種田とゆうちゃんはきょとんと目を点にした。

和也の手が無理やり、美咲を車に引きこもうとしている。

「美夏ちゃん、助けて！」

泣きそうな声で叫んだ美咲先輩を、放っておくわけにはゆかない。こんな時美夏はとてつもなく大胆になる。車に駆け寄ると美夏は美咲先輩の腕を強くつかんで引っ張った。ところが……

運転席の和也は、細く剃り上げた眉を大きくしかめた。

助手席にいる美咲。それにくっついてきた美夏は仕方ないとして、

「お前、どこからそこへ入った!？」

後部座席に一人陣取り、ゆうゆうと座っている少年。

“笹原隆太!”

「さ、ドライブ、ドライブ！」

戸惑う一同を気にもせず、

隆太は元気いっぱいの笑顔を見せた。

「さっさと降りろよ！ お前なんか乗せる気はない！」

「それより、車を止めてっ。無免許なんでしょ！」

「何でもいから、スピード出すのはやめてええっ！！」

誰かれなしに叫ぶ声が、車内に響き渡る。

「……んなこといったって、止めれるかっ！」

「えっ、何で！」

「ブレーキが効かない」

「ええっ！」

「スピード出してんのは俺じゃなくって……」

和也はスピードに取られそうになるハンドルを必死で操作しながら叫んだ。

「この車が勝手に暴走してるんだっ！」

4人の生徒を乗せたシルバーメタルの車は、小気味よさげにきらりと輝くと、学園通りを爆走していった。不思議な事に、普段は交通量の多いこの道路が、今日は車どころか人っこ1人姿が見えない。

クスクス、クス……

後部座席で、楽しげに隆太が笑う。

「笹原っ！ 笑ってる場合じゃないでしょ。何とかなんないの！」

助手席で美咲とぎゅうぎゅう詰めの状態からようやく後を振り返り、美夏はあせった声を出した。

「そんな事言っただって、僕は車なんか運転した事もない」

隆太はにこりと微笑んで前方を指差した。

「それより、前から来たトラックにぶつかるぞ」

嫌ああああっ！！

その瞬間、目のまわりに星屑が散らばった。

\* \*

星空のパイパス、スカイウェイ。流星のように快走するシルバーメタルの車。波音が聞こえる。潮の香りが胸いっぱい広がってくる。

美咲と美夏は、車の窓を開け外の景色に見入った。

時間：夜。場所：海沿いの直線道路。季節：夏？

2人の意見はだいたい、こんな所で一致した。

でもこんな事って……私たち、さつき卒業式を終えたばかりでしょ……

時間も場所も季節も、全部が違ってる。

「ここ、どこ？」

美夏の問いに、先ほどから運転ばかりに気をとられていた和也が、つぶやくようにこう言った。

「西湘バイパス。忘れるもんか、夏におやじと一緒にドライブした道だ。そして、その次の日にあいつはいなくなっちゃった」

「……」

腑に落ちない顔の美夏の耳元に美咲が囁く。

「和也くんのお父さん、夏に亡くなったのよ。事業に失敗して……自殺だったって。でもね、その後すぐお母さんは結婚して……で、彼は少しグレちゃったみたいよ」

ああ、そうか。と美夏の心にしょっぱい気持ちがこみ上げてきた。

だから、先輩はあんなに変わってしまったのか。

西湘バイパス。神奈川県大磯町から小田原市までのほぼ大部分を海岸沿いを通る自動車専用道路。

「ああ、波の音が眠りを誘うなあ」

やっぱり、戻らないとなあ。

一人マイペースを決め込む隆太は、頭の後ろに両手をやると、つまらなそうにごろんとシートにもたれかかった。それから、窓の外に飛んでゆく海辺の景色に目をやった。

走る 走る 暴走する。

流星よりももっと、もっと早く走りたいんだ。

急いで 急いで ただ急いで

時を早く駆けぬけてしまいたいんだ。

海岸道路を一直線に進んでゆくシルバーメタルの車。

「止めてよ！」

「駄目だ。できない」

「そんな事ないでしょうがっ。ブレーキを踏んで。思いっきり踏みしめてっ！」

「嫌だ、こんな場所では止まらない！」



だが、突然煌いた赤い閃光が、4人の生徒たちの堂々巡りの会話を中断した。

対向車線でガードレールにぶつかった車が、激しく炎上している。

窓の外を覗き込んだ美咲の瞳までが、赤く染まってみえるほどの激しい炎。

「事故?!」

すれちがいざまに、見た人の影。寄り添うように運転席にいる2人。

「炎の中に人がいる……黒い影が車の中で揺れてた」

ほんのその数秒が何十分にも思える長い瞬間。美夏は思わず顔を手で覆い、美咲の膝に身を隠した。

消防車とパトカーのサイレンの音がけたたましく響いてきた。そして、その時、ふいにカーラジオからニュースの音声が流れてきた。

7月23日 午前3時40分。西湘パイパス、大磯西インターチェンジ付近が事故がありました。この事故に17歳と16歳の男女が巻き込まれた模様、ただいま身元を確認中……

和也が苦々しい口調で言った。

「助かってないな。あんな酷い炎の中にいたんじゃあ」

徐々に増えてくるサイレンの音が、五月蠅すぎて、耳を塞ぎたくなかった。でも、ハンドルを手放すなんて、絶対できない。やったが最後、今度は、自分たちまでがスピードに巻き込まれてしまう。あんな事故の二の舞は御免だ。

「なら、車を止めればいいのか」

ふいに背後から聞こえてきた声。

「笹原……?」

「ブレーキを踏むだけなんて、誰にでもできる事だよなあ」

投げやりなその言葉。

なのに、その声は、無造作に胸の中に入ってきて、迷っていた心の鍵に手をかける。

思い立ったように和也は足をブレーキに置くと、それを思い切り強く踏みしめた。

こんな事ってあるのだろうか。

幻のように消えてしまったシルバーメタルの車と直線道路。

暗い明かりのない海岸で、4人は漆黒の海を見つめていた。静寂の詰まった空間には、

ざざざ……ざざざと

波が運ぶ砂の音だけが響いている。

その中で目を凝らし

石井美夏、工藤美咲、三浦和也、そして笹原隆太が

見つけたもの。

それは……

海の波間にほのかに灯る4つの漁火。

目が暗さに慣れてくると、漁火の灯の中に人の姿がぼうっと浮かんできた。

1つの漁火に1人の人影。

それが4つ。

白い木綿の上着を着て、腰には小さな竹籠をつけている。

ざざざ……ざざざと

幻影のような4つの姿は浅瀬の穏やかな波の中に、同じ間隔を開きながら横一列に立っていた……沖の方角に体を向けて。

そして、お互いの腰と腰を細い綱で結び、竹籠につけられた小さな漁火だけをたよりに静かに海をすくっているのだ。

海女……？ 海に潜ってはいないけど、多分、貝か海草を採っているんだ。

話す事も、顔を見交わしさえしないで、波の中で、ただ黙々と、すくった何かを籠に運んでいる……。

漁火が波の上に4つの影を映し出す。そして波が動くごとに、それらは沖へ流されてゆくのだ。

隆太を除く3人は、その光景に小さくため息をついた。

「まるで時間が止まったみたい……」

ぽつりとつぶやいた美咲に隣の和也が無言でうなづく。

だが、珍しいほど鮮明な笑顔で隆太が言った。

「違う。時は止まってなんかいやしない……緩やか過ぎるほど緩やかに、ここの時間は動いているんだ」

そうして、遠い夜明けを待ちながら、海をすくい続けているんだよ。

あの人たちが持った、小さな漁火とお互いを結び合った細い綱。

ちっぽけだけど、それがなければ、暗い海をさまようばかりだ。

「笹原、どうしたの。今日はいつになく真面目モード？」

美夏は不思議そうに隆太の顔を覗き込む。その台詞に美咲がくすりと笑った。

「そうやってると、笹原も男前に見えるよ」

もともと俺は男前だ。

ふつりとつぶやく隆太に、和也はちょっと眉をしかめた。

「さっきの事故の2人は時を早く駆けすぎたんだよ。けれども、ここの時間は遅すぎて、何だか哀しい感じがする」

隆太の言葉を待っていたかのように、空が白んできた。

それでも海の中のあの人たちは、だた、黙々と波の中に立ち続けているんだ。

夜明けがもう近いのに

「あ……私、何か泣けてきた……」

知らず知らずのうちに、涙があふれ出て、美夏は思わず袖で顔をぬぐった。悲しさよりもほろ苦いような思いが胸いっぱい広がってしまったのだ。

急いで ただ急いで

時を早く駆けぬけてしまいたいのか。

それとも、哀しいほどに緩やかに

夜明けを待ち続けるのか。

「俺は嫌だ……そんな風に生きるのは」

和也の音が響いたとたん、

ふわりと風が通り過ぎた。

ちらちらと舞う桜の中で、美夏はきよとんと目を見開いた。

卒業式の後、写真撮影と雑談を終えた生徒たちが、次々と校門から出てゆく。

「帰ってきたみたい……」

美夏の呟きを聞いた美咲は、少し離れてたっている和也にいぶかしげな視線を送った。

夢？ ううん。違うわ。和也の後ろに止まっているあの車、

あれは、確かに、私たちを乗せて西湘パイバスを爆走したシルバーメタルの車だもの。

「美夏！ 美夏ったら、急になくなっちゃってどこへ行ってたのよ！」

少し頬を膨らませたゆうちゃんが、種田をひきつれて、こちらの方へ駆けてきた。

「隆太はどこだ？ 親友の俺を置き去りにするなんて、そんなのアリか？」

だが、そう言ったとたん、種田は呆れ顔で近くにあった桜の木の下に目をやった。

「寝てやがる」

桜の木の根元に腰をおろして、すやすやと寝息をたてている隆太。

「おいっ、起きろよ、こんな所で寝るな」

種田がそう言った時だった。

「お前ら、何やってんだ、卒業式はもう終わったんだぞ」

校庭の方から、社会の臨時教師 ー山下ー がやってきた。

“ヤバイ、車に乗ってきたのが見つかった” とっさに、美咲の後ろに身をを隠した和也だったが、もう遅かった。

「高等部の三浦和也……か。お前なあ、校内でやんちゃするだけなら、まだ情状酌量の余地もあるが、無免許運転は法律違反だ。日本全国、いや世界に出たってそれは罪だ！ わかってんのか、警察に知れたら、お前、即退学！ 書類送検」

俯いた和也は山下を上目づかいに見た。でも、何も言葉が出ない。

その時、美夏がぱっと目を輝かせ言った。

「そうだ、三浦先輩、車のキー持ってるよね。それを私に貸して！」

「そりゃ、持ってるけど、どうすんだよ。お前が運転するってか」

“違うわよ”

「はい、運転するのは、“先生”。免許証持っているんでしょ」と、美香は受け取った車のキーを山下に向けて差し出したのだ。

「何！ ……という事は、俺に三浦を家に送らせて、こいつの無免許運転は知らん顔をしとけてつもりなのか」

美夏、美咲、とりあえずよく場面を把握できないでいたが、ゆうちゃんと種田……そして三浦

和也。こくこくと、首を縦に振る5人。

「先生、頼むよ。俺、きちんと免許がとれるまではこの車は運転しない事に決めたんだ。髪の色ももとに戻すし、学校にもきちんと来る……退学なんて嫌だよ。俺はもっこの学校で、みんなと色んな事がやりたいんだ」

こいつ、何を言い出すかと思ったら、やけに真剣な目で

仕方がないかと、山下は、しぶしぶ首を縦に振った。

「わかった。キーを貸せ。でも、三浦、お前の家ってどこなんだ」

「大丈夫、車だったら、学校から30分」

「30分？ 帰りはどうすんだよ。俺はまた学校に戻んなきゃなんないんだぞ」

種田が言う。

「電車があるじゃん」

山下は慫然とした表情で言った。

「交通費出せよ」

うわっ、セコいっ。顔を見合わせ美夏とゆうちゃんは目と目で語りあう。

「……で、そこで寝てる笹原のことだが、それも、どうにかしておけよ」

桜の木の下で隆太を指差して山下が言う。

「だって、先生、さっきから何回も起こしてるのに、こいつ気持ち良さそうに眠ってて全然起きないんだ」

「保健室にでも寝かせとけっ。俺が帰ってきてても寝てたら、たたき起こして帰らすから」

山下はそう言うと、和也と2人でシルバーメタルの車を飛ばして行ってしまった。

「あれって、スピード違反じゃないの」

美香とゆうちゃんが苦笑いを浮かべる。

「じゃ、俺、隆太を保健室に連れてゆくわ」

よいしょと隆太を背中にしょって、歩いてゆく種田に美香とゆうちゃんが“ご苦労様”と声をかけた。その2人に美咲が言った。

「じゃ、またクラブでね。高等部になっても、クラブ交流はあるもんね」

それと、

今まで、わがまま言ってごめんね。

美夏はその笑顔に同じような笑顔で答えた。

保健室に続く廊下、隆太を背中にしよいながら、種田はふと窓から飛び込んできた桜の花に目をやった。

くるくると舞って隆太の頭に落ちてきたひとひらの桜。

もろともに あはれと思へ 山桜

花よりほかに 知る人もなし

ふと種田の心にそんな句が浮かび上がった。

この句の意味って、何だっけ……

山桜よ。花のおまえくらいしか、心をかよわす人がいないのだ……

「桜しか心をかよわす人がいないなんて……そんな事ないよな」

種田は隆太の顔をちらりとうかがってつぶやいた。

「俺とお前は親友なんだろう」

\* \*

「まったく、無駄に時間をくっちゃまった」

和也を自宅まで送り届け、学校へ戻ってきた臨時教師の山下は小さく息をついた。もう時間は夕刻にせまり、校舎に人影は見当たらない。

そういえば、笹原はどうしただろう。

桜の木の下で眠り込んでしまっていた隆太。

種田に保健室に連れて行けと言っておいたが、まだ、そこにいるのだろうか。

何だかやけに気になって、山下は保健室へ向かう廊下を足早に歩いていった。

窓から1枚、また1枚と飛び込んできた桜の花びらが、くるり、くるりと舞いながら、その後を追う。

保健室の扉を少し開いた時、山下は一瞬、その手を止めた。

おかしい……この向こうの空気……何か、違う。

くるりと鼻先に舞い降りてきた桜の花びら。その瞬間、はっと目を見開き、山下は力まかせに

保健室の扉を開いた。

「笹原っ！！」

桜、桜、桜の花が……

保健室全部を薄桃色に染め上っている。

上下左右に乱舞する桜吹雪。

山下は唖然と、保健室の机に座って彼を見ている隆太の方に視線を移した。

「あれ、おっさん。何で来ちゃったんだよ」

「笹原！？ お前、ここで何してるっ?!」

「何って、もう、戻るんだよ」

「戻るってどこへ!？」

山下の言葉に隆太は少し笑って言った。

“時の中心へ、時の彼方へ”

「心配すんな、1年もすれば戻ってくるから。でも、本当は嫌なんだ。いつかは帰って来れなくなるから……その場所で時を見据える。それが、俺の仕事だから……」

春を迎え、夏を過ごし、秋を羽包み、冬を見守る

四季の守人

桜色の空気が元にかえってゆく。それと共に隆太の姿も薄まり出した。

「い、1年たったら、戻ってくるんだな!? 今回は戻ってくるんだな」

「もどってくるよ。まだ、俺はみんなと遊んでいたいから」

「1年後のいつ?!」

「1年後の春に」

こいつが普通じゃないのは、前からわかっていたんだ。けれども、こんな別れは御免だぞ。山下はまくしたてるように、大声で叫んだ。

「約束しろっ! 必ず1年たったら、帰ってくると」

「約束? おっさんにしては、かわいい事を言うんだな。なら……」

「なら……?」

隆太の言葉に山下はぐっと息を飲み込んだ。

すると、隆太は鮮やかに笑った。



「時を止めておくよ。春のまま。次に帰ってくるその時まで」

お、おいつ、冗談じゃないぞ！ 時を止めてゆくなんて、そんな事、困る！

激しく舞い上がった桜吹雪。

クスクスクスと……

その中いっぱいに広がった隆太の笑い声。

それが、やがて聞こえなくなった時、保健室には山下1人が取り残された。

人っ子ひとり、ひとひらの桜も残さずに……。

「行っちまいやがった……」

山下はただ、啞然と保健室の窓から暮れてゆく空を見つめていた。

\* \*

夏

「結局、夏が来たじゃないか。笹原の奴、時を止めるなんて言いやがって」

葉桜になった桜の木でがなりたてるミンミン蝉が五月蠅くて、山下は眉間に皺をよせた。

「あ、先生。今度来た留学生がワンゲルサークルに入るってよ」

校庭の向こうから駆けてくる種田とゆうちゃんに山下は笑顔を作った。

「へえ、留学生か。誰でも大歓迎だ。これでメンバーが3人だな」

「美夏もテニス部と兼部してくれるかもしれないって」

今年、山下が、学校で発足させたワンダーフォーゲルのサークル。といっても、メンバーはこれから集めるのだが。

「笹原が帰ってきたら、即入部させるしな」

と、種田が笑った。

「でも、俺はまだ信じられない。隆太に海外留学なんて似合わなすぎだ」

苦し紛れに言ったものの、やはり無理があったかと山下は笑う。

種田たちと別れてから1人で校庭を歩いていると、他の生徒たちの声が山下の耳にふと響いてきた。

「この桜の木っておかしいんだよね。春からずっと上の方に一輪だけ、枯れない桜の花がついてるんだ」

「うっそお。誰かがいたずらで偽物をつけてんじゃないの」

「わざわざあんな高い場所に登ってまで？」

走り去る生徒たちを入れ替わるように、桜の木の下にやってきた山下は真上を見上げて、小さく笑った。

花よりほかに知る人もなし

「そうか、あの桜の花の時だけをお前は止めていったのか」

葉桜の中に、鮮やかに映える薄桃色の桜の花。

季節は移り変わってゆく。そして、この日の時は夏。

【時の魔術師～春～】 ー完ー

## 時の魔術師～月下美人の話

---

夏祭りの宵山も終わりに近づくと、そこはかたなく空虚感が漂う。とくに、今日みたいに、親友がつきあい始めた彼氏なんぞを連れてきた日には、なおさらだ。

「あ～あ、ゆうちゃんは、彼氏とさっさと帰っちゃったしなあ」

午後10時。

中学2年の美夏（みか）は、今日の後片付けをはじめだした近所の人たちを尻目に、自宅の2階の窓からぼんやりと外を眺めていた。祇園祭り山鉦が最後にもどってくる寺町に長年住んでいるものだから、何時までも人の出入りがおさまらない。このお祭りが終わったら、7月が終わる。そして、夏休みが始まるのだ。

「ああ、つまらない。夏休みが来ても、何あんにも、どきどきすることがないんだもん」

べつにゆうちゃんと争おうなんて気はないけれど、少しは胸がときめく出来事があってもいいのにな。

けれども、窓辺の広縁に腰掛けてため息をついたとき、美夏は、通りの向こうを歩いてゆく制服姿の少年を見つけてしまったのだ。半袖の白いシャツに黒ズボン……お祭りの夜だっていうのに、あの後ろ姿は……

「笹原！ 笹原（ささはら）龍太（りゅうた）！」

同級生のその少年は、顔はいいのに言動はかなり不審。給食以外は学校が嫌いなくせに、服装はいつも学校の制服。

だが、呼びとめられた彼がくるりと後ろを振り返ったとき、美夏はあっと声をあげてしまった。

白狐（びゃっこ）のお面？！

「ちょっ、笹原、何やってんのよ！ そんなもん付けて」

「だって、今日はお祭りだから……ちょっとノリで」

「や・め・な・さ・いっ！ 夜道に学生服の白狐って、怖いだけだから！」

「こんこん、ちきちん、こんちきちん♪」

「や・め・ろ」

美夏のむっとした声にさすがに不味いと思ったのか、龍太は、慌てて白狐の面を外した。

白い面の下から覗いた端正な顔。さらりとした前髪の下には、狐目よりもずっと涼やかな瞳が、鮮やかにきらめいている。こいつの眉目秀麗さには、いつも、一瞬、呆れてしまう。後輩などには、龍太に恋心を抱く者もいたりするが、でも、それは大勘違いだっつうの。

「それにお祭りの宵山は、もう終わりでしょ」

「何だ、つまらない。花の宴はこれからが酣（たけなわ）だっていうのに」

「あらあら、柄でもないことを言っちゃって。でも、夜に花の宴だなんて、変じゃないの」

「いや、そこの月下美人が、ほら、もう、花卉（はなびら）を開くから」

「月下美人？」

そのとたんに、美夏がいる古い木造りの家の2階の広縁（ベランダ）から、ふわりと、うっとりするような香りが流れてきたのだ。百合よりももっと優しい芳香が鼻先に漂ってくる。

龍太が指差した広縁で咲く、透き通るような白い花。

“月下美人”

闇夜の中でも、その名のごとく月の光を身に纏い、姿が浮かび上がって見えるほど 一大きく美しい 蓮のような花卉（はなびら）。

そういえば、お昼に膨らんだ蕾を見て、お母さんがそろそろ“咲くよ”って、言ってたっけ。

名前も変わっているが、この花は相当の変わり種のように、月下美人に関しては色々な言い伝えや都市伝説が飛び交っている。

すべての花が同じ日に咲く。

花が咲くのは一年に一度一夜限り。

新月の夜にしか咲かない。

その花言葉は儚（はかな）い恋。

そして、この目に染み入るような素晴らしい香りで、花粉を運ぶ夜行性の虫たちを呼び寄せているのだという。

“儚い恋”かぁ。なんか心魅かれるけど。でも、ラブラブ中のゆうちゃんには毒な花か。

そのとき、窓の下にやってきた龍太の前髪を、吹いてきた夜風がさらりと撫で上げた。涼しげな瞳が、美夏の独り言を笑うように下から見据える。

「はかないこい」

「えっ、今、何か言った？」

私の空耳だろうか。何だか今、自分の心を見抜かれたような……。

焦った美夏は、慌てて、龍太から視線をはずし、月下美人の方へ目を向けた。

月下美人はまだ、咲いている。数時間もすれば儚くしぼんでしまう花。

「お、お母さんたちにも、早く、花が咲いたのを知らせてあげなきゃ」

だが、立ち上がろうとしたとき、突然、月下美人の強い香りが鼻腔に流れてきて、美夏は突然、猛烈な眠気に襲われてしまったのだ。

\* \* \*

ざわざわと人々のざんざめく声が聞こえる。強く香ってくる花の香りがやけに鼻をついてくる。

こんこん、ちきちん、こんちきちん♪

「待っていて！ 夜明けには必ずここに帰ってくるから」

うるさいなあ……眠いののに耳元で大きな声を出さないで……

「あ……ん？ 夜明けって……今、何時？」

「亥の刻」

亥の刻？ はあ、どういうこと。

肩をつかまれた強い力に、眠気を飛ばされ、美夏はぎょっと手前に立った青年に視線を向けた。

「……え」

藍染の半着と袴。油で堅めた後ろ髪に鬘（まげ）。そして、腰には、か、刀あ！  
おまけに彼の腕には、返り血までがついている。

お、お祭りのコスプレ？ それにしては、凝りすぎてるよ。

その時突然、大通りの向こうから、強い呼子の笛の音が響き、辺りの空気がにわかに総毛立ったのだ。

「四国屋は偽装だった！ 急げ、会場場所は池田屋だ！」

そんな叫び声とともに、大通りをだんだら模様の羽織の武士たちが、駆けてゆく。

背中には“誠”の文字。

その瞬間、つい最近に見た、幕末アニメの画像が、美夏の脳裏に浮かび上がった。

ちょっ、ちょっと、あれって、新撰組じゃん？ あれもコスプレ？

……で、池田屋って！

「まさか、これって、あの有名な池田事件が起こってるの？」

池田屋事件は、幕末に、京都 三条大橋近くの旅館・池田屋に潜伏していた長州藩・土佐藩などの尊王攘夷派志士を、新選組が襲撃した事件だ。

折しも、今夜はその日と同じ祇園祭の宵山の日で、ここから、三条大橋は目と鼻の先。

こんこんちきちん、こんちきちん♪

笹原龍太のふざけたような鼻歌が、美夏の脳裏を通り過ぎてゆく。

「今、捕まれば、捕縛か斬首だ。でも、待ってて、僕は必ず、夜明けまでには君を迎えに戻ってくる。あの月下美人の花が凋（しぼ）んでしまわないうちに！」

鬻（まげ）を結った青年の台詞が、かっこよすぎる。

次の瞬間、その青年に、がばっと抱きすくめられて、美夏は超あせってしまった。

「ま、ま、待って。あなたって、幕末の志士か何かっ。なら、戻ってきたりしちゃダメ。アニメじゃ、こういうのを死亡フラグっていうんだからっ」

……で、この場合、私って、その恋人役？

美夏を残して、走りだした幕末の青年志士。堪らないほど切ない、彼が、振り返った時に見せた心残りが超絶に表れた表情。

ああ、胸がきゅんきゅんして、たまらない。そうだ、こんな時には、私も何か言ってあげなきゃ。

けれども、美夏には、気の効いた台詞なんて浮かびやしない。

「待って、待ってっ！ ……行かないでっ」

なりふり構わず、駆けて、彼の背中にしがみついた。その時、鼻づらに何かが当たった。その堅い感触に、美夏はきょとんと目を瞬かせる。

白狐のお面？

「こんな夜中に、後ろから襲うなんて、お前って、大胆な奴」

聞き覚えのある、とぼけた声に、前を見上げ、美夏はええっと声をあげてしまった。

何故なら、美夏が必死に追いかけた背中には、狐の顔をした白いお面があって……

まさか、私が、全身全霊で追いかけた相手って……

「笹原っ、何で“あんた”に、“私が”しがみついてんのよっ！」

「……そんなの、こっちが聞きたい話だよ」

大慌てで手を離れた美夏。笹原龍太は、背にしまった白狐の面ごしに、その姿をくすりと笑った。切れ長の瞳が、涼しげに夜の景色の中で煌めいていた。

「あの月下美人が咲いて散る、ちょっとした時間の悪戯だったんだ」

「……？」

「はかないこい」

訳のわからぬ顔をした少女に、また、人の悪い笑みを浮かべる。それから、隆太は軽く手を振って、そのまま、三条大橋の方向へ歩いて行った。

彼の背中で白狐の面が物言いたげに揺れていた。

月下美人が咲いた祇園祭の一夜の話。

ただ、それだけ……と。

\* \*

「美夏、いつまで寝てるの。学校に遅れるわよ」

そんなお母さんの声に、私ははっと目を覚ました。朝？　そういえば、昨日は遅くまで起きて、花を見ていたんだった。

「月下美人、もう、閉じちゃったわよ。昨日、あれだけ眺めてたんだから、もう、満足でしょうけど」

窓辺に目を向けると、そこには固く花弁を閉じて凋んだ白い蕾が、寂しげに首をうなだれていた。

ああ、花が終わっちゃた……。

“月下美人の花が凋む前に、必ず、また、ここに戻ってくるから！”

そんな幕末志士の青年の台詞が、脳裏に浮かび、守られなかった約束に、切ないような気分になる。

嘘つき。戻ってきてくれなかったじゃん……。

でも……私、やっぱり、夢を見ていたんだらうなあ。

「月下美人の花言葉は、儂い恋かあ」

けれども、美夏が、ため息をつきながら、階段の方へ歩いていった時、ふっと強い月下美人の香りが、鼻先に流れてきたのだ。

えっ、また花が……

振り返った美夏は、窓辺で大きく花を咲かした月下美人の白い花に、大きく目を見開いた。

月下美人は1年に1度しか、しかも夜にしか、花を咲かせないって聞いてたのに……

クス、クス、クスっ……



どこからか響いてきた微かな笑い声。

聞き覚えのあるその声に、美夏は不思議な気分ぐるりと辺りを見渡した。

窓から吹き込んできた朝の風が、そんな少女の頬を優しくなせていった。そして、

窓辺の月下美人の花は、ぱらりと儂い花を散らせた。



また、いつか。

そんな言葉を残した後に。



## 時の魔術師～小説版

<http://p.booklog.jp/book/32431>

著者：風梨凜

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kazanasi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32431>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32431>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.